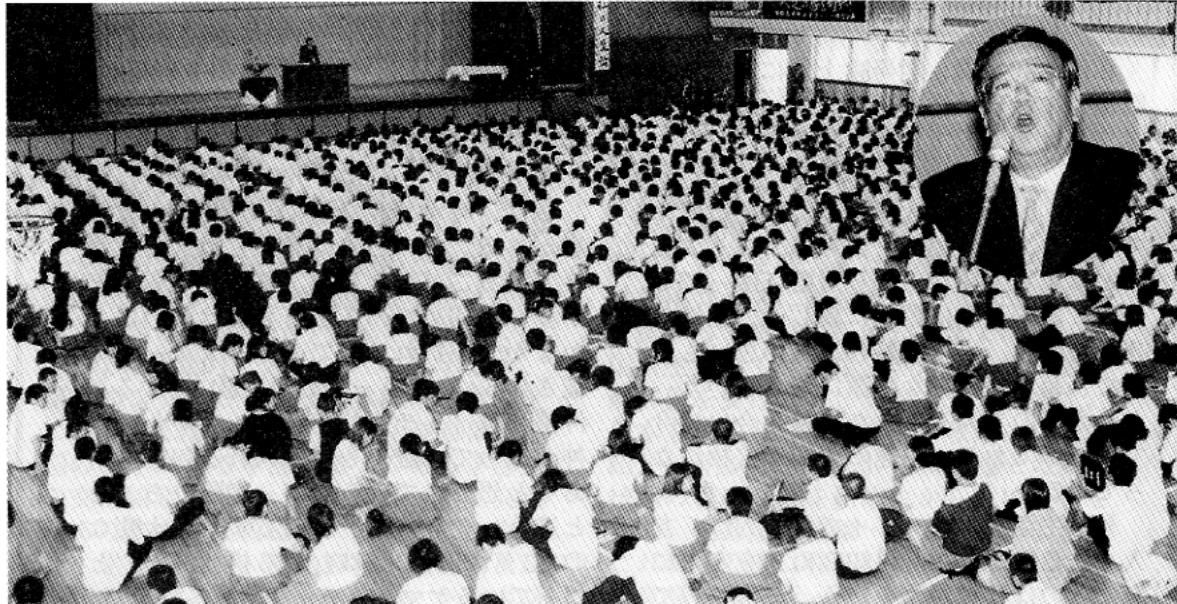


# 卓志報



▲翁長雄志那霸市長(那霸高22期)母校の創立記念日に「私の人生論」で講演、熱心に聞き入る那霸高校生

## 創立記念日

1947年9月30日、首里高等学校の那霸分校が設立認可され10月1日、那霸市内旧天妃国民学校跡に開校する。生徒は、首里高校より314人、糸満高校より255人、その他の高校より12人、合計581人。学校区は那霸市、小禄村、真和志村、豊見城村の一部と定められ、10月11日開校式を挙行し、この日をもって創立記念日と定めた。

### 〈生徒の感想から〉

◆自分の志を捨てるな、ということを教えて頂いたような気がします。

自分も将来なりたいのがあります、いつも「無理だろうな。絶対に…」と自信がなかったのですが、今回の講演を聞いて、「何年かあってもいい。とにかく、志を捨てないでおこう!」と決めました。本当にいいお話をでした。

(2年 与儀拓哉)

◆高校生活は、今も昔もそんなに変わらないことが分かりました。でも、遊ぶときは遊んで、勉強や、やるべきことは、きちんとしなくちゃいけないと思いました。

当時の那霸高校生は優秀で、校内での50番以内は県で70番以内に入ることで、驚きました。この素晴らしい伝統を、後輩に伝えられるようがんばらなければいけないと思いました。

(2年 儀間知征)



## 会員寄稿

### 国際理解教育は身の回りから

金城光男(那覇高7期)  
元国際協力事業団職員

私は約40年間、開発途上国に対する国際協力の仕事に従事してきた。アジア、アフリカ4カ国で17年余暮らしたことになる。

途上国勤務を「大変でしたね」と慰めてくれる人が多いが、当方は少しも大変だとは思っていないから対応に困ってしまう。異国の風俗習慣に親しみ、土地の言葉を覚え、人情に触れ、怖い思いも含めて、毎日が新鮮な刺激に満ちていた。たくさんの友人もできた。付き合いは今でも続いている、私達の大切な宝物になっている。

外国生活をエンジョイできる人は、友人を作るのも旨い。見知らぬ人を友人に変えるのは挨拶が物をいう。とはいっても、初めての人と挨拶を交わすのは、かなりの勇気が要る。国際人とは、一つには他人に関心を持つ人で、他人と進んで人間関係を築いていける人である。そのきっかけは、挨拶を交わす勇気から始まるものである。

挨拶の仕方は国によって実に千差万別だ。タイは微笑みで相手を魅了してしまう。タンザニア人はすれ違う誰とでも「ジャンボー」と言って愛想よく挨拶を交わす。だから、話のきっかけを作るのが容易だし、親しくなるのも早い。同じアフリカでもエチオピアはちょっと違う。仲間同志は長年の知己のように、頬ずりをしたり肩を抱き合ったり、実に濃密な挨拶を交わすが、身分の高い者に対しては何とも素っ気ない。それが礼儀なのだと

いう。

日本人は社交性に欠け、国際性が無いと言うのが国際社会での通り相場である。

ウチナーンチュはどうであろうか。

私は、時々ゴルフ場に一人で出かける事がある。そのときは見知らぬ人とラウンドすることになるが、気疲れすることが多い。初めての人と打ち解けるのはなかなか骨が折れるのである。大ホールで催されるパーティーでも同じ思いをする。沖縄には「イチャリバチョーデー」の精神があって、誰でも受け入れる包容力があると思われている。が、実際はちょっと違う。チョーデーになるまでが大変なのだ。「沖縄の人はむしろ排他的だ」と思っているヤマトンチュも結構多い。

しかし、新しい変化の兆しが見えてきた。過日、母校の那覇中学校にお邪魔する機会があった。印象的だったのは、廊下ですれ違う生徒が見慣れぬ訪問客に、「こんにちは」と挨拶をしてくれたことだった。つい、こっちも微笑んで、「こんにちは」と返す。これだけでも中学生と私の間には暖かい連帯感が芽生えてくるのを感じた。私は思った。これが国際理解教育の基本だと。最近、教育現場では国際理解教育が重視されている。挨拶の励行は他人に関心を持つ心を培う。この日常のささやかと思える事が国際人の育成に大きくなっている。国際教育の場は身近にあったのだ。

私は那覇中学校の試みが実を結ぶ日を楽しみにしたい。

## 会員寄稿



### 大学における国際交流（異文化接触）

吉田 茂（那覇高10期）  
琉球大学農学部教授

琉大は我が国最南端に位置する唯一の国立大学であり、その立地条件を活かして、基本方針の柱の一つに“国際交流に貢献する教育研究”をかかげている。

ここでは、私が係わった国際交流を紹介したいと思います。

大学の国際交流には組織的な交流と個別的な交流があり、個別的な交流は教職員・学生が個別に行う交流であるので、ここでは組織的な交流について述べます。組織的な交流の一つは大学間の交流協定に基づいた教職員・学生交流と学部間（外国の大学にある学部と琉大のある学部）の交流協定に基づいた教職員・学生交流があります。交流協定に基づいて、教職員・学生の交流、学術資料・刊行物及び情報の交換、セミナー・会議・シンポジウム等の共同開催、共同研究、交流する学生の検定料・入学料・授業料を徴収しないこと等が実施されております。十年前（昭和63年）は大学間交流協定校が1校のみでしたが、現在（平成14年）は大学間交流規定校が25校、学部間交流協定校が11校に増えています。琉大が近年、国際交流に力を入れている成果だと思われます。農学部の学部間交流協定で私が最近係わったのは、インドネシアのボゴール農業大学（平成13年交流協定締結）とベトナムのハノイ農業大学（平成14年の夏に交流協定を締結する予定）です。ボゴール農業大学とはすでに教官・学生の交流がはじまっております。ハノイ農業大学とはこれから交流協定を結ぶわけですが、それに先立って同大学の教官一人が琉大の博士課程で研究をしておりま

す。

組織的な交流のもう一つは学外の諸機関、例えば JICA 等からの委託により開設している外国人受託集団研修コース等があります。農学部では熱帯農林資源の有効利用コースと森林土壤コースを開設しております。私は熱帯農林資源の有効利用コースに開設当初（昭和59年）から係わっており、平成13年までに約50ヶ国（主として発展途上国）から約百名の研修生を受け入れ、交流をしています。日本を中心とした先進国の政策・技術の紹介と研修生の出身国の農業実態と政策・技術の程度などを研修生から直に情報を得て、先進国の政策・技術をどのようにこれからどの国に移転したらよいかについて意見交換を行っています。又、これまでにアジアとアフリカで研修のフォローアップ・セミナを実施しました。私はアフリカに出かけて行き、修了生をまじえて政府の政策・技術担当者などと研修がどのようにその国の農業開発に活かされているか、又、これから来る研修生に特にどのようなことを研修すればよいか、について意見交換をして、今後の研修に活かすようにしました。修了生の中には帰国後、日本政府の奨学金を得て琉大から修士や博士の学位を授与された者も數名います。

同窓会員で、将来琉大へ来られる方々には、国際交流の輪に積極的に参加していただき、大きな視野のもとに相互理解を深めて、沖縄県の、又、相手国の発展のために貢献可能な教育研究に取り組んでいただければと願っております。

## 同期生会だより

○○○○○○○○○○○○ 20世紀最後“夢”つなぐ ○○○○○○○○○○○○

松茂良 興辰 (那覇高13期)

卒業40周年及び20世紀末を記念しての那覇高第13期生同期会が西暦二千年（平成12年）10月7日、那覇東急ホテルで開始された。東から西から南から北から約170人が集う盛況ぶりでミレニアム同期生会開催の意義は十分に見出すことができた。その背後には、「荒鷺会（会員10人）」「雑魚会（同13人）」「五仙会（同16人）」「華幸会（同11人）」「M A C S（同10人）」女性のみの「葦葉の会（同22人）」東京近郊の「でいご会（同31人）」等々、模合グループの存在が原動力になったのは言うまでもない。その模合グループは、旅行・ハイキング・花見・ゴルフと季節ごとに楽しみ、同期の友情を温めている。今回の同期会では「笑涯（生涯）現役でがんばろうよ！」と誓い、4年後の再会を楽しみに散会した。

13期生は、昭和16年生れを中心に構成され

た昭和35年卒業生である。その面々は20世紀末で還暦を迎えたのであるが、“還暦”そのものに対する評価が二分するほど微妙な年齢ともなっている。

西暦二千年（平成12年）8月10日は、我等の母校那覇高が県代表として第82回全国高校野球選手権大会夏の甲子園初出場、初の一勝をした記念すべき日である。あの無欲でひたむきなプレーは、多くの同窓生の胸を打ったものである。その際、我等13期生は129人から87万円のカンパを募り、物心両面からの支援ができたことを誇りに思っている。

一方、9月の「シドニー五輪大会」開催や7月の名護市・万国津梁館会議棟で開催された主要国首脳会議（沖縄サミット）等は、正に20世紀最後“夢”つなぐイベントであり、世紀末記念の有意義な同期生会であった。

○○○○○○○○○○○○ 那覇高校19期生の集い ○○○○○○○○○○○○

福里政彦 (那覇高19期)

昭和41年、3月。那覇高校を卒立って30数年……。各界、各方面で活躍する同期生が多い中、この4月宜名真盛男君が沖縄県観光リゾート局長に就任しました。沖縄県のリーディング産業として注目されている観光行政を司る重要なポジションであるだけに、有志で集まって彼を激励しながら酒でも飲み交わそうかという話がどこからともなく湧きでてきました。有志数名が集まり二回、三回と打ち合わせを重ねるうちに、多くの同期生にも呼びかけて同期会を兼ねたらどうかということになり、「宜名真盛男君激励会」「那覇高19期同期会」と二本立ての催しになった次第です。

会は金城まり子さん（RBC）の司会進行で始まりました。コンベンションビューロー提供の観光ビデオ

で幕明けし、ひととおりの挨拶をすませ「思い出アルバム」をスライドで紹介して盛り上げる段取りでしたが会場は最初からユンタクばっかりで司会もさぞ苦労した事でしょう。

15年ぶりの同期会としては小ぶりでしたが「宜名真盛男君激励会」としては盛会のうちに終えたと思います。



## 城岳同窓会定期総会・懇親会

平成14年度定期総会が5月27日（月）午後5時30分よりパシフィックホテルで開催されました。

宇良宗真会長が議長となり、議事を進行した。例年の通り、平成13年度事業報告、決算報告、14年度事業計画、予算審議及び役員改選が行われた。副会長金城弘征氏、高良ミチ子氏が任期満了となり、新たに真栄田司氏、玉寄澄子氏が選任された。

懇親会は例年以上に参加者（330名）も多く、女性や若い20歳代の会員の姿も見受けられた。また、稲嶺知事も公私多忙の中、駆け付けられ、祝辞を頂いた。

今回は同期生同志の記念撮影が数組みもあり、余興、懇談と賑わい、来年の再会を誓いあって閉会となつた。



▲城岳同窓会懇親会の模様

## 二中健児の塔慰靈祭



▲戦没学徒の刻名に見る遺族

6月23日は沖縄にとって忘れられない日であり、全県的に慰靈祭が行われている。

二中健児の塔慰靈祭は、遺族、同窓生、那覇高職員、PTA役員、教育実習生及びクラス代表・吹奏楽部・合唱部・放送部等の生徒が参加し、御靈を慰めた。今回は神森小学校3年1組（代表：つはこまい）から千羽鶴の献呈があった。

## 事務局だより

平素より城岳同窓会のさらなる充実発展のために、ご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。同窓会は母校の発展に寄与することを目的として、奨学金の支給など教育活動を物心両面から支援しています。しかし、同窓会予算が緊縛している現状で、援助が困難であります。会費未納の会員は是非ご協力をお願いします。

□年会費	1,000円
□終身会費（一括払い）	5,000円

なお、同窓会館三階は会員の親睦の場としてクラス会、会議、展示、趣味の集りなどに利用しています。より多くの会員が活用下さいますようお願いします。同窓会員のみの利用となっています。

□使用料（光熱費）1団体 1時間 600円

事務局 電話 867-2525

源河徳博



▲城岳同窓会館、後方は那覇高校の校舎



## 城岳同窓の事績の継承発展を

那覇高等学校校長 金 城 富 昭

4月に那覇西高校から異動してきましたが、20数年前にも6年間勤務したことがありますので、二度目の赴任になります。城岳同窓会の事績の大きさは承知しているつもりでしたが、5月27日の同窓会の総会・懇親会では、会場を溢れんばかりの出席者と稲嶺知事をはじめ県内の政治・経済界等のトップとして活躍なさっている同窓の顔ぶれに改めて二中・那覇高校の伝統の重みと、このような学校の責任者としての使命の大きさを痛感しているところです。

本校の現況を報告しますと、生徒数1560人(39学級)、職員115人で県内では最も規模が大きいのは変わりありませんが、看護科が本年度から募集停止になりましたので二年後には普通科のみになる予定です。本校は文武両道が伝統といわれるとおり、平成12年度に夏の甲子園に出場、平成13年度には高校総体でサッカーの優勝、吹奏楽部が全琉音楽祭で大賞受賞、本年度の高校総体でも多くの種目でベス

ト8に入賞するなどスポーツ・文化活動で伝統の強さを發揮して大きな成果をあげています。進学については県内上位の成績を維持していますが、国公立大学への現役進学率をもっと引き上げるよう先輩や地域などから指摘されており、その取組を強化しているところです。

県内の高校の状況は大きく変化し、進学を中心とした特色ある学校などの影響もあり、文武両道・自由な校風を維持しながら、多様な生徒のそれぞれの進路を実現するには現状のままでは難しい状況もあります。社会の変化に対応し、地域のニーズに応えられるような学校づくりが求められていますが、そのためには、蓄積された伝統の力を活用しながら中高一貫教育などの新しい制度を取り入れるなどの学校活性化策を検討する必要があるのではと考えています。

20世紀の約百年の二中・那覇高校の歴史の中でも多くの人材を輩出してきた伝統を21世紀にも発展させるためには、「和衷協同」「積極進取」の校訓の精神で時代を先取りできる学校づくりが求められています。同窓会の諸先輩のご指導ご鞭撻をお願いします。

## ネイサンヘイル高校との交流会

那覇高等学校教頭 真栄田 盛夫

那覇高校と姉妹校である米国ワシントン州シアトルにあるネイサンヘイル高校の交流は1975年から始められ、2002年3月で第27回目の派遣になる。同じ高校と交流を続けた年数は全国一長く、伝統校としての本校の誇るべき実績のひとつである。毎年本校の生徒10名程度と引率教諭1名が3月上旬に渡米し、サンフランシスコの見学旅行の後、3週間ホームステイをしながらネイサンヘイル高校へ通い、ホストの生徒と授業を受けている。派遣された生徒は一月近くの異文化を体験し、視野を広げ、見識を深め、生徒にとって自己を見直す良いきっかけとなり、その後の学習意欲にも大いに好影響を及ぼしている。受け入

れにおいては以前は3年に1回の割合でなされていたが、最近4、5年間は、ネイサンヘイル高校から毎年生徒が本校を訪問するようになってきた。長く交流が続いた背景には両校ホストファミリーの温かい理解と協力がある。今後もこの充実した交流プログラムが学校を挙げて協力支援され、生徒たちの貴重な体験の場として、持続、発展してほしいものである。

## 城岳同窓会会報

編集発行 城岳同窓会  
〒900-0014 沖縄県那覇市松尾1-21-53  
電話・FAX 098-867-2525